

江田船山古墳(玉名郡和水町)

江田船山古墳公園として、他の清原台地古墳群の三基とともに保存・整備されている



周溝越しに三段築成の墳丘を見たところ/正面が後円部で、手前に標柱が立っている/右奥が前方部/北側から見たところ

[video](#)



括れ部の辺りを見たところ/左手が後円部、右手は前方部

 [video](#)



左手の後円部側を見たところ



同じく、右手の前方部側を見たところ/正面の手前に張り出している部分は造出部/前方で同行者が見ているものは説明板



これが標柱/「史跡 船山古墳」と刻まれている



同行者が見ていたのは造出部についての説明板/造出部から後円部の家形石棺へ行く墓道があったらしい

史跡 江田船山古墳

造 出 部



造出部位置図

造出部は、くびれ部の左右に、付け加えられた墳丘のことを言います。方形をしたこの造

出部から、多くの遺物が出土しました。儀式の場として使用されていたと思われます。

今までの発掘の歴史

江田船山古墳が最初に発掘されたのは、明治6年(1873)です。家形石棺から貴重な多数の副葬品が出土しました。

大正6年(1917)に、浜田耕作・梅原末治両氏により調査が行われその後、研究が発展していきました。



最初の発掘を物語る石灯籠



大正6年撮影江田船山古墳全景

造出部の発掘調査

昭和60年に周溝調査が行われ、位置と深さがわかりました。そして墳丘に造り出しがあることがわかりました。

この造り出しのそばから遺物がまとまって出土しました。造り出しが儀式の場として使われたと考えられます。家形石棺の入口はこの造り出しに向いています。ここから石棺へ行く墓道があったと考えられます。



周溝の発掘状況



発掘された造出部

前方後円墳の形の変化



4世紀ごろ

前方部が低く平らで、後円部が高い。

5世紀ごろ

前方部が高くなり、正面が開く形となる。

6世紀ごろ

前方部がさらに大きくなり、後円部が小さくなる。



墓前祭の想像図

この造り出しで、墓前祭などが行われたと考えられます。この場か

ら、墓道を通して石棺へ向かいました。

FREE WiFi

これは前方部を後ろから見たところ

 [video](#)



左手(西側)から見たところ/左手に造出部が張り出しているのが見て取れる



前方部をアップで見たところ



そこで、左手の造出部をアップで見たところ(説明板が立っている)



同じく、右手を見たところ/前方部後ろの周溝は前方で左手に回り込んでいる



前方に進んで、振り返って見たところ

 video



そこで、右手を見たところ/正面の張りだしは、説明板があった造出部とは反対側の造出部/前方部から後円部方向に見たところ



前方部方向に進んで、振り返って見たところ/正面の張りだしが造出部



そこで、右手(後円部の後ろ側)を見たところ



括れ部の辺りを見たところ/左手が前方部、右手は後円部/左手前が造出部

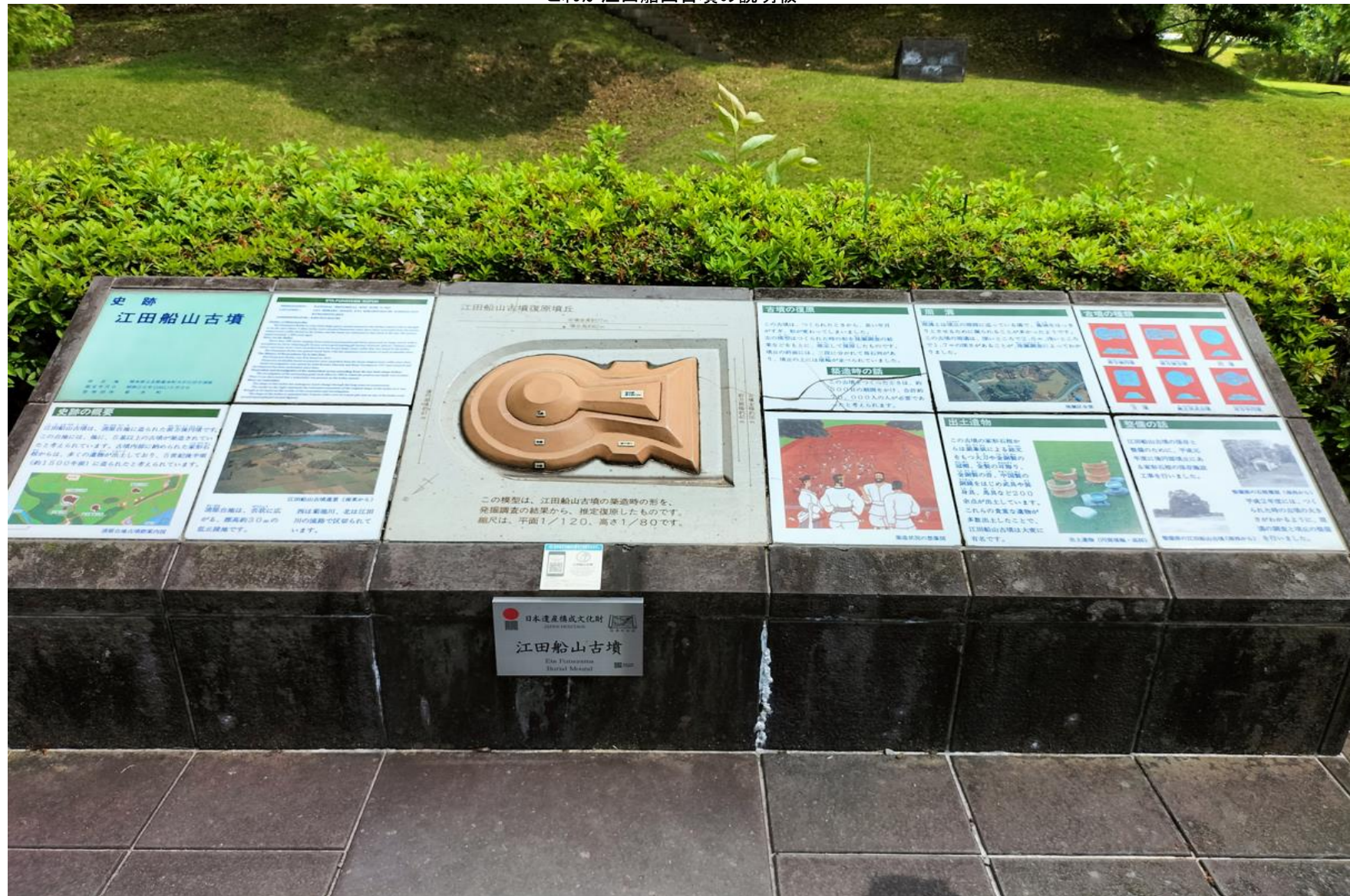
 video



江田船山古墳の西側に所在する京塚古墳の墳頂から見た江田船山古墳の全景/左手が後円部、右手は前方部/手前に説明板がある



これが江田船山古墳の説明板



史跡の概要

江田船山古墳は、清原台地に造られた前方後円墳です。この台地には、他に、5基以上の古墳が築造されていたと考えられています。古墳内部に納められた家形石棺からは、多くの遺物が出土しており、5世紀後半頃（約1500年前）に造られたと考えられています。



清原台地古墳群案内図



江田船山古墳遠景（南東から）

清原台地は、舌状に広がる、標高約30mの低丘陵地です。

西は菊池川、北は江田川の流路で区切られています。

造出部が二ヶ所ある

江田船山古墳復原墳丘

古墳全長約77m

墳丘長約62m

後円部径約41m

古墳全幅約56m
前方部幅約40m

前方部
高さ約7.5m

中殿

通り出し

北

この模型は、江田船山古墳の築造時の形を、
発掘調査の結果から、推定復原したものです。
縮尺は、平面1/120、高さ1/80です。

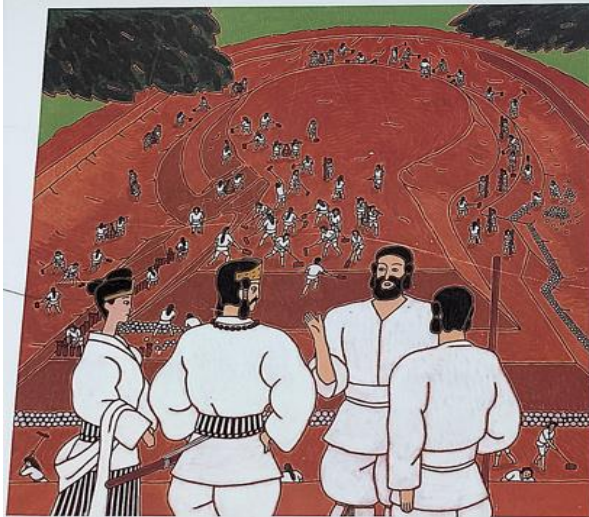
古墳の復原

この古墳は、つくられたときから、長い年月がすぎ、形が変わってしまいました。

左の模型はつくられた時の形を発掘調査の結果などをもとに、推定して復原したものです。墳丘の斜面には、三段に分かれて葺石列があり、墳丘の上には埴輪が並べられていました。

築造時の話

この古墳をつくったときは、約500日の期間をかけ、合計約70,000人の人が必要であったと考えられます。



築造状況の想像図

周 溝

周溝とは墳丘の周囲に巡っている溝で、墓域をはっきりとさせるために掘られることが多かったようです。この古墳の周溝は、深いところで2.6m、浅いところで1.7mの深さがあることが、発掘調査によってわかりました。



発掘区全景

古墳の種類



前方後円墳



前方後方墳



円墳



方墳



帆立貝式古墳



双方中円墳

出土遺物

この古墳の家形石棺からは銀象嵌による銘文をもつ大刀や金銅製の冠帽、金製の耳飾り、金銅製の沓、中国製の銅鏡をはじめ武具や装身具、馬具など200余点が出土しています。これらの貴重な遺物が多数出土したことで、江田船山古墳は大変に有名です。



出土遺物（円筒埴輪・高杯）

整備の話

江田船山古墳の保存と整備のために、平成元年度に後円部墳丘にある家形石棺の保存施設工事を行いました。



整備前の石棺覆屋（南西から）



整備前の江田船山古墳（南西から）

平成2年度には、つくられた時の古墳の大きさがわかるように、周溝の調査と墳丘の整備を行いました。

さて、これは江田船山古墳の墳丘に登って、後円部の墳頂から前方部方向を見たところ

 [video](#)



こちらは前方部の墳頂から後円部方向を見たところ/コンクリートの構造物が見える

 [video](#)



コンクリートの構造物の正体は家形石棺の保存施設だった

 [video](#)



何と言っても特筆されるのは、銀象嵌による75文字の銘文が刻まれた大刀(直刀)である。

石棺に納められた遺物(副葬品)

この石棺から出土した遺物は、総数92点にものぼる。現存する代表的遺物には、銅鏡6面、勾玉7個、管玉14個、玻璃玉90余個、衝角付兜1個、短甲3領、大刀14口、剣7口、刀装金具一括、槍身4口、鉄鎌一括、金銅製冠帽3個分、帯金具一括、金銅製沓1足、轡2組、鐙2組、金製垂飾付耳飾り2対、金環1対、須恵器坏(蓋付)1組、同提瓶1個等がある。

船山古墳の名を高らしめたのは、75文字にのぼる銀象嵌の銘文と、菊花文および天馬を施した、長さ85cmの大刀一口の存在である。銘文は、日本最古の金石文として、また、天馬(ペガサス)は、ギリシャ文の影響と伝播の説明のため、高校の日本史の教科書等にも度々引用されてきた。

これら数多くの副葬品は、大部分が大陸とのつながりをしめす遺宝であり、被葬者達の実力のほどを窺い知ることができる。

大刀(銘文の象嵌)

大刀(天馬の象嵌)

古墳の内部（横口式家形石棺）

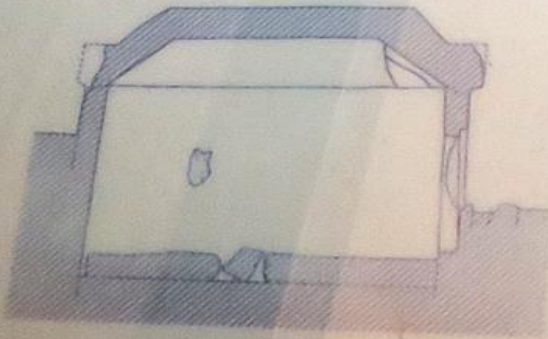
この石棺は、明治6年（1878）池田佐十氏を中心とする地元の人々によって発見されたものである。

このように、家形石棺の妻部に入口を設けた石棺を、横口式家形石棺とよび、佐賀、福岡、熊本の県境一帯に多く見られる特殊な石棺である。横穴式石室を強く意識し、追加合葬を予定して造られたものであろう。

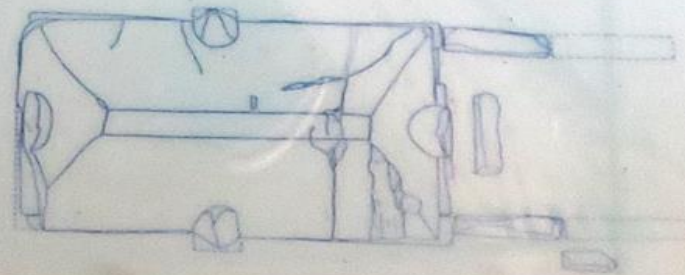
石棺内部の奥行きは2.2m、同横幅1.1m、天井までの高さは1.45mで、内部全面に朱が塗られている。石材は、加工の容易な阿蘇熔結凝灰岩を用いている。

この種の石棺は、古墳時代中期の前方後円墳等の内部主体として造られ、大型で豪華なものが多い。

県下では、石ノ室古墳（城南町塚原所在）の横口式家形石棺がよく知られている。

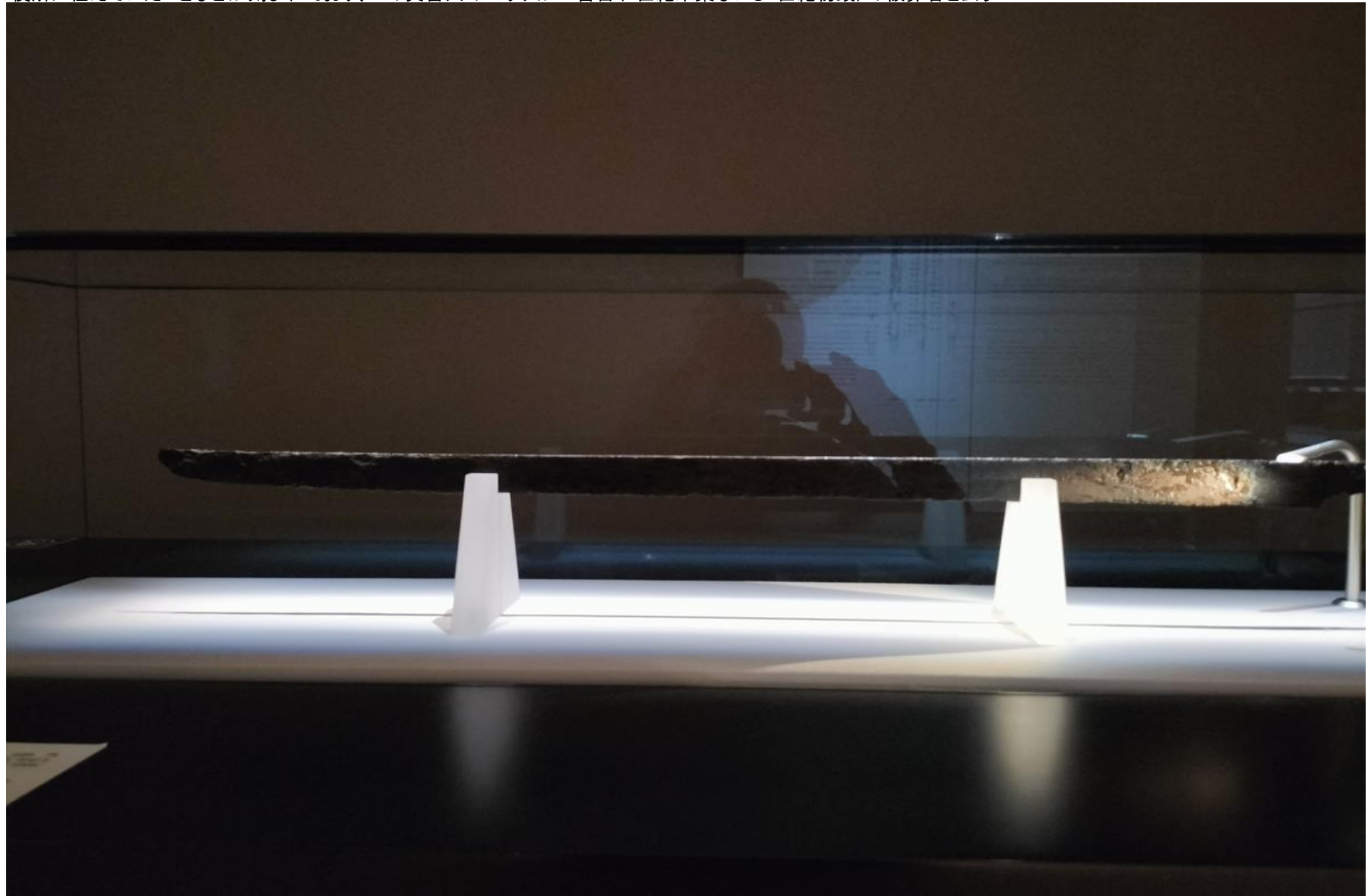


石棺断面



石棺平面

これが江田船山古墳出土の銀象嵌銘大刀(国宝)/東京国立博物館にて撮影/銘文にはワカタケル大王(雄略天皇)の時代にムリテが典曹という文書を司る役所に仕えていたことなどが刻まれており、この典曹人のムリテが二番目(5世紀末葉ないし6世紀初頭)の被葬者と云う



片面には魚と鳥が銀象嵌で表されている



これは熊本県立装飾古墳館の展示のキャプション

江田船山古墳

Etafunayama Tumulus

(国指定史跡 5世紀後半)
(所在地 玉名郡和水町江田)

Historical site(designated by the State)
Middle of Kofun period(Latter half of 5th century AD)
The site is located in Nagomi city,Kumamoto Prefecture.



出土品



● 耳かざり (金銅製)



● 冠帽 (金銅製)



● 鏡 (青銅製)

菊池川中流域にある前方後円墳です。明治6(1873)年に発見されました。
銀象嵌のベガスや75文字が刻まれた大刀や、金銅製の冠など、この時に発見された出土品約200点は、国宝として東京国立博物館に保存及び展示されています。

同じく、江田船山古墳出土の高坏(左手)と石製管玉、メノウ製丸玉、ガラス製小玉・丸玉(右手)



ところで、江田船山古墳の墳丘の周りには、出土遺物の他に短甲を着けた武人の石人が配置されていた。

石人山古墳に始まり、6世紀前葉の岩戸山古墳で最盛期を迎え、その後消滅していく、墳丘の周りに石人・石馬を配置するというこの地方独特の型式を示している。岩戸山古墳は筑紫君磐井の墓であると目されており、江田船山古墳も筑紫君一族の配下に連なった地域の中首長の墓と想像されている。

そして筑紫君一族の配下が時のヤマト王権に出仕していた（王権に組み込まれていた）ということを考えると、筑紫君磐井の乱がそれから間もない継体朝にヤマト王権と対峙するような大きな争乱であったとは思えないのだが・・・（ちなみに、筑紫君磐井もヤマト王権に出仕していた時期があったとも思える記述が日本書紀に残っているようだ）

[参考:岩戸山古墳\(八女市\)](#)

